

GOLF SWING CORRECTING IMPLEMENT

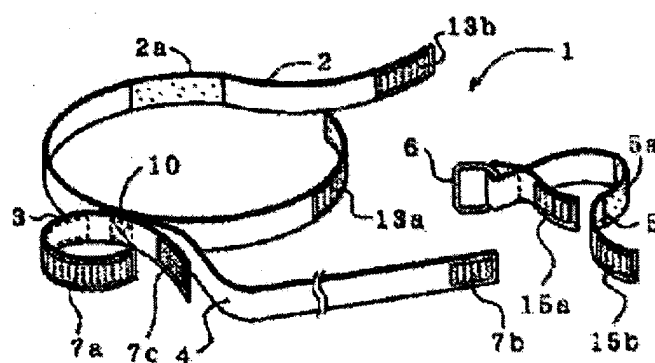
Publication number: JP2001104531
Publication date: 2001-04-17
Inventor: ARAKAWA KEISUKE
Applicant: ARAKAWA KEISUKE
Classification:
- **International:** **A63B69/36; A63B69/36;** (IPC1-7): A63B69/36
- **European:**
Application number: JP19990288010 19991008
Priority number(s): JP19990288010 19991008

Report a data error here

Abstract of JP2001104531

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a swing correcting implement which enables a training person for golf swing to make repetitive training of swing in an ideal form.

SOLUTION: A torso belt 2 is wound around the user's torso and a first arm belt 3 is wound around the right arm. Since the torso belt 2 and the first arm belt 3 are sewed together, both belts are inseparable. Further, a second arm belt 5 is wound around the left arm and since the first arm belt 3 and the second arm belt 5 are connected by a regulating belt 4 and a connecting fitting 6, both arms do not eventually open more than a prescribed spacing (the length of the regulating belt 4). When the user wearing the correcting implement 1 is going to make the swing in actuality, the opening of the right side and the opening between both arms are forcibly suppressed and therefore the collapse of the form is corrected and since the left arm is openable, the unnatural form may be averted. Accordingly, the training person is able to make the form approximate to the ideal swing and to master this form by iterative training.



Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号
特開2001-104531
(P2001-104531A)

(43)公開日 平成13年4月17日(2001.4.17)

(51)Int.Cl.⁷

A 6 3 B 69/36

識別記号

5 3 1

F I

A 6 3 B 69/36

デマゴート*(参考)

5 3 1 B

審査請求 未請求 請求項の数4 O L (全 7 頁)

(21)出願番号 特願平11-288010

(22)出願日 平成11年10月8日(1999.10.8)

(71)出願人 599142796

荒川 圭介

愛知県名古屋市昭和区山手通2丁目2番地
の3 山手通シティハウス511号

(72)発明者 荒川 圭介

愛知県名古屋市昭和区山手通2丁目2番地
の3 山手通シティハウス511号

(74)代理人 100093751

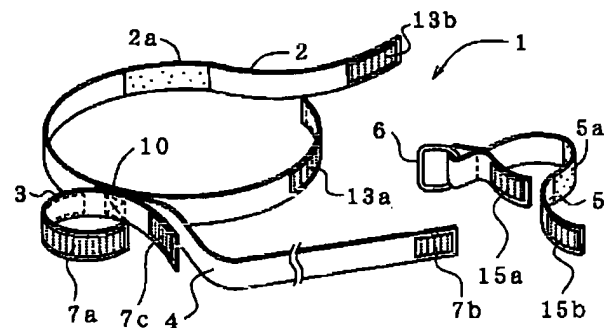
弁理士 菅原 正倫

(54)【発明の名称】 ゴルフのスイング矯正具

(57)【要約】

【課題】 ゴルフのスイングの練習者が、理想的なフォームに近い状態でスイングの反復練習を行えるようなスイングの矯正具を提供する。

【解決手段】 胴部ベルト2は使用者の胴部に巻かれ、第1の腕ベルト3は右腕に巻かれる。そして、胴部ベルト2と第1の腕ベルト3は縫い付けられているため、それら両ベルトは離間不可能となっている。さらに、第2の腕ベルト5は使用者の左腕に巻かれ、第1の腕ベルト3と第2の腕ベルト5は調整ベルト4及び連結金具6を介して接続されているため、両腕間は所定の間隔(調整ベルト4の長さ)以上は開かないこととなる。矯正具1を装着した使用者が実際にスイングを行なう場合には、右脇の開き及び両腕間の開きが強制的に抑えられるためフォームの崩れが矯正され、さらに、左腕は開くことが可能となっているため不自然なフォームとならない。したがって、理想的なスイングのフォームに近くなり、練習者はそのフォームを反復練習して身につけることができる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 胸等の胸部に着脱可能に巻かれる胸部ベルトと、

左右の一方の腕に着脱可能に巻かれ、かつ前記胸部ベルトに直接又は他部材を介して間接的に連結された第1の腕ベルトと、

左右の他方の腕に着脱可能に巻かれる第2の腕ベルトと、

その第1の腕ベルトと第2の腕ベルトとの間隔が調整可能に、その第2の腕ベルトを前記胸部ベルト又は第1の腕ベルトに直接又は他部材を介して間接的に連結する調整ベルトと、

を含むことを特徴とするゴルフのスイング矯正具。

【請求項2】 胸等の胸部に着脱可能に巻かれる胸部ベルトと、

左右の一方の腕に着脱可能に巻かれ、かつ前記胸部ベルトに連結された第1の腕ベルトと、

左右の他方の腕に着脱可能に巻かれる第2の腕ベルトと、

一端部が前記胸部ベルトの前記第1の腕ベルトの近傍に連結され、他端部が前記第2の腕ベルト側に延び、前記第1の腕ベルトと第2の腕ベルトの間隔を調整可能に該第2の腕ベルトを連結させる調整ベルトと、

を含むことを特徴とするゴルフのスイング矯正具。

【請求項3】 前記第2の腕ベルトには、前記調整ベルトの他端部を折り返して固定し、その折り返し長さを変えることで、前記第1の腕ベルトと第2の腕ベルトの間隔を調整する連結金具が付属している請求項1又は2に記載のゴルフのスイング矯正具。

【請求項4】 前記第1の腕ベルトの周方向の一部と、前記調整ベルトの一端部とが前記胸部ベルトに共に縫い付けられている請求項1ないし3のいずれかに記載のゴルフのスイング矯正具。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明はゴルフのスイング矯正具に関する。

【0002】

【従来の技術】ゴルフのスイングを練習する場合には、打球が飛びやすい、あるいは打球を思い通りの位置にコントロールし易い理想的なフォームを目指してスイングの反復練習が行われる。その理想的なフォームとしては、例えば右手側に振りかぶってバックスイングをする場合には、バックスイング時において右脇を開かないように行い、かつ終始両腕間隔が所定間隔以上開かないようにすることが一般的には望ましい。なお、その場合、左脇はバックスイング時においてある程度開くこととなる。しかしながら、実際にスイングを行う練習者は自己のフォームを見ることができないため、指導者等からの指導、あるいは教本等による指導を念頭におきつつフォ

ームを修正することが多くなる。そのような練習方法では、フォームの矯正の効果が薄いため、練習者は自分のスイングフォームを鏡等でチェックしたり、あるいはマンツーマンで上級者等からフォームについての指導を仰ぐことになるが、そのような場合では、鏡等の用具が必要となったり、或いは、上級者がいなければフォームチェックができないこととなり不便な点が多々あった。

【0003】そのような実情に鑑み、スイングフォームの矯正具として例えば特開昭54-6178に示されるようなものが提案されている。この発明では、スイングを行う練習者の胸部と一方の腕（例えば右腕）をベルト等で強制的に接近させ、その状態に保ちながらスイングを行なう矯正具が提案されている。従って、着用者である練習者は一方の腕の脇（例えば右脇）が開かないフォームでスイング練習を行えることとなっていた。このような方法では、確かに一方の脇を閉じた状態に強制的に保つことができるが、他方の腕については矯正具が作用しておらず、両肩と両腕とのいわゆる三角形を維持することが難しく、矯正具として不十分な面があった。

【0004】一方、実開平4-70066には両方の腕を矯正するような用具が提案されている。この発明は、ベルト等によって両方の腕を練習者の胸部に絶えず接近した状態に維持するものであり、練習者は両脇を閉じた状態に強制的に保たれてスイング練習をすることができると。しかしながら、このように両脇を閉じた状態に強制的に維持した場合、例えばバックスイング時を考えると、後方の腕（右手側にバックスイングする場合は右腕）は脇が閉じた状態に維持され、かつ両腕の間隔が一定間隔に保たれるという点においては望ましいが、一方では前方の腕（右手側にバックスイングする場合は左腕）も脇が閉じた状態に維持されるため、前方の腕は自然に振りかぶることができず窮屈で不自然なスイングとなってしまう。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】本発明の解決すべき課題は、ゴルフのスイングの練習者が、理想的なフォームに近い状態（一方の腕の脇が終始開き過ぎず、かつ両腕間隔が一定範囲内に保たれ、さらに、他方の脇はある程度開く余裕がある状態）でスイングの反復練習を行えるようなスイングの矯正具を提供することにある。

【0006】

【課題を解決するための手段及び発明の効果】上記のような課題を解決するために、本発明のゴルフのスイングの矯正具は、胸等の胸部に着脱可能に巻かれる胸部ベルトと、左右の一方の腕に着脱可能に巻かれ、かつ前記胸部ベルトに直接又は他部材を介して間接的に連結された第1の腕ベルトと、左右の他方の腕に着脱可能に巻かれる第2の腕ベルトと、その第1の腕ベルトと第2の腕ベルトとの間隔が調整可能に、その第2の腕ベルトを前記胸部ベルト又は第1の腕ベルトに直接又は他部材を介し

て間接的に連結する調整ベルトと、を含むことを特徴とする。

【0007】このように、胴部ベルトを胸等の胴部に、第1の腕ベルトを左右一方の腕にそれぞれ巻き、それら両ベルトを直接又は間接的に接続することで着用者の胴部と一方の腕を所定間隔内に保つことができる。従って、着用者はスイング中に第1の腕ベルトが巻かれた一方の腕と胴部とが開きすぎることなくスイングを行えることとなる。さらに、両腕間隔は第1の腕ベルトと第2の腕ベルトとが調整ベルトによって連結されて所定間隔内に保たれるため、両腕間隔が開きすぎような崩れたフォームとならずにスイングが行え、着用者は理想のフォームに近い状態でスイングの練習ができることになる。

【0008】また、胸等の胴部に着脱可能に巻かれる胴部ベルトと、左右の一方の腕に着脱可能に巻かれ、かつ前記胴部ベルトに連結された第1の腕ベルトと、左右の他方の腕に着脱可能に巻かれる第2の腕ベルトと、一端部が前記胴部ベルトの前記第1の腕ベルトの近傍に連結され、他端部が前記第2の腕ベルト側に延び、前記第1の腕ベルトと第2の腕ベルトの間隔を調整可能に該第2の腕ベルトを連結させる調整ベルトと、を含むことを特徴とするゴルフのスイング矯正具とすることもできる。

【0009】このように、胴部ベルトに第1の腕ベルトを連結させることで、第1の腕ベルトが巻かれた腕と胴部との接近状態を維持でき、スイング中は絶えずその接近した状態が保たれる。したがって、着用者はその腕における脇の開きを強制的に無くすることができ、反復練習によって脇の閉じたフォームを習得することができる。また、調整ベルトが胴部ベルトにおける第1の腕ベルトの近傍に連結されているため、両腕間は所定間隔内に保たれることとなり、かつ第2の腕ベルトが巻かれた腕においては脇が閉じた状態が強制されず、不自然なフォームとならない。

【0010】さらに、前記第2の腕ベルトに連結金具を付属させ、前記調整ベルトの他端部を前記連結金具にて折り返して固定し、その折り返し長さを変えることで、前記第1の腕ベルトと第2の腕ベルトの間隔を調整するようにできる。このように、調整ベルトにおける他端部の折り返し長さを変えることのみで両腕間隔を決定する調整ベルトの長さを変更できるため、使用者、使用環境に合わせた調整ベルト長さとしてすることができ、また、その長さの変更も迅速かつ容易にできることとなる。

【0011】また、前記第1の腕ベルトの周方向の一部と、前記調整ベルトの一端部とを前記胴部ベルトに共に縫い付けるようにすることができる。このような構造とすることで、第1の腕ベルトと胴部ベルトとの接触状態が保たれ、第1の腕ベルトと第2の腕ベルトとの最大間隔は胴部ベルトに縫い付けられた調整ベルトによって決定できることとなる。また、単純な構造で効果的に作用

し、安価なものとすることができる。

【0012】

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施の形態を図面に示す実施例を参照しつつ説明する。図1は本発明の一例であるゴルフのスイング矯正具1（以下、単に矯正具1とも言う）を示している。矯正具1は、帯状の胴部ベルト2と、第1及び第2の腕ベルト3及び5と、帯状の調整ベルト4とを有している。そして、これらの胴部ベルト2、第1の腕ベルト3及び調整ベルト4は縫着部10において一体的に縫い付けられている（なお、縫い付けでなく、接着、一体形成、その他の手法によって固定してもよい）。さらに、これらのベルトと分離された第2の腕ベルト5が備えられ、連結金具6が取り付けられている。なお、胴部ベルト2には着脱式連結手段として圧着テープ（圧着ファスナ）13a、13bが縫い付け、接着、一体形成その他の手法で設けられ（形成され）更に第1の腕ベルトには圧着テープ7a、7cが、第2の腕ベルトには圧着テープ15a、15bが、そして調整ベルト端部においては圧着テープ7bがそれぞれ縫い付けられている。

【0013】そして、矯正具1を使用する場合には、まず、胴部ベルト2を着用者の胴部（胸部又は腹部等）に巻き、左胸部又は腹部近傍において圧着テープ13a、13bを圧着する。その際、胴部ベルト2の一部には伸縮可能なゴム等の伸縮材2aが所定長さ（例えば15cm程度）備えられているため、胴部が著しく締めつけられずに若干の動きが許容され、かつ胴部から胴部ベルト2がずれ難くなっている。さらに、第1の腕ベルト3を右腕上腕部に巻き、圧着テープ7cを圧着テープ7a上に圧着させ、次いで、第2の腕ベルト5を左腕上腕部に巻いて圧着テープ15a、15bを圧着する。最後に、胴部ベルト2から延びる調整ベルト4の端部を連結金具6に通して所定の長さ折り返し、調整ベルト4の端部における圧着テープ7bを第1の腕ベルト3上に備えられた圧着テープ7aに圧着して装着を完了する。このようにベルトを所定の部位に巻き付けて圧着テープによって圧着することで、服装の乱れがなく容易に装着でき、かつ、それぞれの圧着位置が装着上苦にならない部分であるため、着用者が容易に着脱でき、使い勝手の良いものとなる。なお、第2の腕ベルト5においても伸縮可能なゴム等の伸縮材5aが所定の長さ（例えば4cm程度）備えられているため、左腕上腕部において第2の腕ベルト5が伸縮可能となっており、また、左腕において著しく締め付けられることなく、若干の動きが許容されることとなる。

【0014】次に、上記方法にて矯正具1を実際に使用者に装着した場合について以下に詳しく説明する。図4に示されるように、胴部ベルト2は使用者の胴部に巻かれ、第1の腕ベルト3は右腕に巻かれている。そして、胴部ベルト2及び第1の腕ベルト3は縫着部10（図

1)において縫い付けられているため、それら両ベルトは離間不可能となっている。従って、胴部ベルト2が巻かれる胴体と第1の腕ベルト3が巻かれる右腕は、それらベルトが装着された部分において絶えず接近した状態が保たれ、装着中に右脇が開くことがなくなることとなる。さらに、第2の腕ベルト5は使用者の左腕に巻かれ、第1の腕ベルト3と第2の腕ベルト5は調整ベルト4及び連結金具6を介して接続されているため、両腕間は所定の間隔(調整ベルト4の長さ)以上は開かないこととなる。

【0015】図5には、矯正具1を装着した使用者が実際にスイングを行っている状態を示している。このようなバックスイング時においても、右脇の開きを強制的に抑えることで右脇が閉じた状態となり、かつ両腕は所定間隔内に保たれるためフォームの崩れが矯正され、さらに、左腕は開くことが可能となっているため不自然なフォームとならない。したがって、理想的なスイングのフォームに近くなり、練習者はそのフォームを反復練習して身につけることができる。

【0016】図2に戻り、スイング時における両腕間隔の調整方法について説明する。両腕間隔は着用者の体格等の影響を受け、また、着用者のフォーム習得の度合いによって効果的となる間隔で行うことが望まれるため、着用状況に合わせた固有の間隔とすることが望ましい。本発明では、その間隔調整を以下の様に行う。図2

(a)は連結金具6に調整ベルト4を貫通してからの端部の折り返しを少なくした場合であり、この場合においては、第1の腕ベルト3と第2の腕ベルト5とを接続する調整ベルト4が長くなっている。即ち、第1の腕ベルト3と第2の腕ベルト5の最大間隔が長くなることとなる。また、図2(b)は連結金具6に調整ベルト4を通してからの端部の折り返しを長くした場合であり、この場合は、第1の腕ベルト3と第2の腕ベルト5の最大間隔が短くなる。このように、連結金具6に調整ベルト4の端部を通し、折返し長さを調節して圧着テープ7aに対する圧着テープ7bの圧着位置を決定するだけで、第1、第2の両ベルト間の最大間隔を最適な長さにすることができる。以上のような方法により、着用者は迅速かつ容易に両腕間の最大間隔を調節できるため、例えば着用中にスイングに違和感を感じたり、あるいは上級者によってフォームの崩れの指摘を受けたような場合においては容易にベルト間隔を変更できるのである。なお、図1において、第1の腕ベルト3の着脱式連結手段(圧着テープ7a)は自身の巻付けのためと(圧着テープ7c等の着脱式連結手段)、調整ベルト4の連結のためとの、双方の連結に兼用(共用)ものとされ、その圧着テープ7aが当該テープの長手方向に長く延びて形成されている。よって、着脱式連結手段の個数や構造が簡単になり、かつ、調整ベルト4の連結操作もやりやすい。

【0017】また、図3には本発明の変形例1について

示している。図3(a)は調整ベルト4を第2の腕ベルト5に接続する前の図、図3(b)はその接続後の図である。図3において調整ベルト4は胴部ベルト2に縫着されており、その縫着部10aは胴部ベルト2と第1の腕ベルト3の縫着部10から離れた場所にある。そして、左腕は縫着部10aを基点とする所定長さの範囲(縫着部10aを基点とした連結金具6までの距離)内でのみ脇の開きが可能となるため、縫着部10aが第1の腕ベルト3の近傍にある場合に比べ(即ち、図1の場合に比べ)左脇の開きの最大間隔は若干狭くなることになる。従って、左腕の脇の開きが著しいような場合、あるいはスイング時に左肘が胸部前方に著しく突出してしまうような場合等においては有効な矯正が行えることとなる。

【0018】次に、その他の変形例について以下に説明する。図6は図1に示される矯正具1について簡略的に図示したものである。図6は胴部ベルト2と第1の腕ベルト3が縫着部10において縫着され、調整ベルト4の基点となる縫着部10aは縫着部10と一体となっており、その調整ベルト4が第2の腕ベルト5に備えられた連結金具6に挿通されて折り返され、圧着テープ7bが圧着テープ7aにて圧着されるという状態を説明している。なお、前述したように胴部ベルト2は圧着テープ13a、13bを圧着することで胴部に装着し、第1の腕ベルト3は圧着テープ7a、7cを圧着することで、第2の腕ベルト5は圧着テープ15a、15bを圧着することでそれぞれ両腕に装着することとなる。そして、装着中は伸縮材2a、5aによって部分的に伸縮可能としている。このような図示方法で、図7以下に変形例を示し、その変形例について以下に説明する。

【0019】図7は変形例2について示しており、この変形例2とは、連結金具6が第1の腕ベルト3の近傍に備えられ、第2の腕ベルト5に縫着された調整ベルト4が、その縫着部10aを基点として連結金具6にて折り返されて長さ調節されるというものである。図6のように、連結金具6が第2の腕ベルト5に備えられた場合、右手で連結金具6に調整ベルト4を挿通する場合には、右手の手先を左上腕部に接近させても無理な体勢とならず、挿通作業を容易に行えるが、左手で行う場合には、左上腕部近傍に左手の手先を接近させるだけで体勢に無理が生じ、その状態でその手先を器用に動かすことは難しい。従って、右手よりも左手のほうが器用な着用者(例えば、左利きの着用者)にとっては連結金具6への調整ベルト4の挿通が多少困難となる。しかしながら、図7のように、折り返し部分を第1の腕ベルト3が巻かれた右腕近傍に備えることで、左手での挿通操作が容易となり、左利き等の着用者にとって使い勝手の良いものとする事ができる。

【0020】図8には変形例3について示している。変形例3は、胴部ベルト2と調整ベルト4を一本のベルト

によって一体的に構成している。そして着用者の右腹部近傍に備えられた圧着テープ11a、11bを互いに圧着させることで胴部ベルト2を装着し、その胴部ベルト2から延びる調整ベルト4によって両腕間隔を調整することとなる。このようにすることで、簡易な構成で目的を達成でき、加工工程の削減につながる。

【0021】また、図9は変形例4について示している。変形例4は調整ベルト4の基点となる縫着部10aを縫着部10と一体的にするのではなく、環状に形成された第1の腕ベルト3の周上において縫着部10から離れた部分に設けられている。このようにすると、胴部ベルト2に直接調整ベルト4が取り付けられていないため、胴部と左腕との間隔はほとんど拘束されず左脇はほぼ自由に開閉可能となる。従って、右脇の開きと両腕の開きを矯正することのみに焦点を絞ったスイングの反復練習が行えることとなる。なお、図10に示されるように、連結金具6を第1の腕ベルト3に備え付け、調整ベルト4の基点となる縫着部10aを第2の腕ベルト5の周上に設けることで、左手での連結金具6への挿通操作がし易くなるようにしてもよい。

【0022】さらに、図11に示されるように、第1の腕ベルト3を胴部ベルト2に縫着させず、調整ベルト4と胴部ベルト2とにそれぞれ縫着されてそれらベルトを接続する接続ベルト4aを設けるようにしてもよい。このようにすると、第1、第2の腕ベルトが胴部ベルト2に縫着されていないため、両脇を閉じた状態に完全に矯正するものとはならず若干の開きが許容されるため、ある程度矯正が緩和されているが、調整ベルト4と胴部ベルト2が接続ベルト4aによって接続されているため、両脇が過度に開きすぎることはならない。なお、図6等のように、胴部ベルト2と第1の腕ベルト3が完全に離間不可能となっている矯正具は、右脇の開きが著しい場合の矯正に使用し、図11のように、若干の開きが許容される矯正具は、ある程度右脇の開きが矯正されている段階で使用するように習熟度に合わせてもよい。

【0023】また、本発明において、胴部ベルト2、第1の腕ベルト3、第2の腕ベルト5、及び調整ベルト4について伸縮材以外の部分の材質は、例えば、天然又は合成繊維、天然又は合成皮革、樹脂、金属等の伸縮性のないもの、又は少ないものとすることができる。又は、

各ベルト2、3、4、5等の全体をゴム又はそれらの複合材料等の伸縮性に富んだものとしてもよい。さらに、胴部ベルト2、第2の腕ベルト3において一部に伸縮材を備えるようにしたが、同様に第1の腕ベルト3や調整ベルト4において伸縮材を備えるようにすることもできる。また、着脱式連結手段としては、圧着テープに限るものではなく、ボタンの嵌合、金具等クランプ具でのクランプその他適宜の着脱構造を採用可能である。さらに、調整ベルトの折り返し長さを変えることにより第1、第2の腕ベルトの間隔を変更するのではなく、調整ベルト自体の長さを変えること、例えば調整ベルトを分割して複数（例えば2本）の分割ベルト部として、その分割ベルト部をオーバーラップさせてクランプ具で固定する構造とし、そのクランプ具をアンクランプ状態としてスライドさせる等することにより、上記オーバーラップ量を変更して、上記第1、第2の腕ベルト3、5間の間隔調整を行なうこともできる。つまり、オーバーラップ量を大きくすれば第1、第2の腕ベルト3、5間の間隔は小さくなり、オーバーラップ量を小さくすれば上記間隔は大きくなる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明のゴルフのスイング矯正具の一例を示す斜視図。

【図2】調整ベルトの長さ調整方法を示す説明図。

【図3】図1の変形例1を示す図。

【図4】図1の矯正具を装着した状態を示す図。

【図5】図4のスイング状態を示す図。

【図6】図1の矯正具を簡略的に示した図。

【図7】変形例2を簡略的に示す図。

【図8】変形例3を簡略的に示す図。

【図9】変形例4を簡略的に示す図。

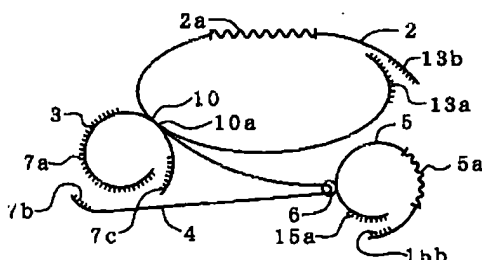
【図10】変形例5を簡略的に示す図。

【図11】変形例6を簡略的に示す図。

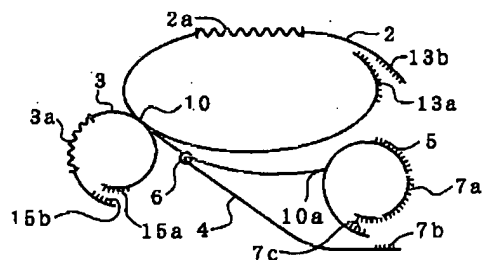
【符号の説明】

- 1 ゴルフのスイング矯正具
- 2 胴部ベルト
- 3 第1の腕ベルト
- 4 調整ベルト
- 5 第2の腕ベルト
- 6 連結金具

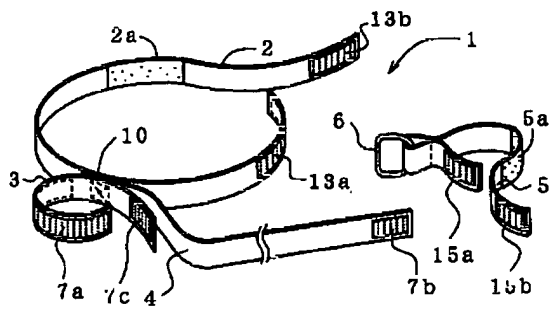
【図6】



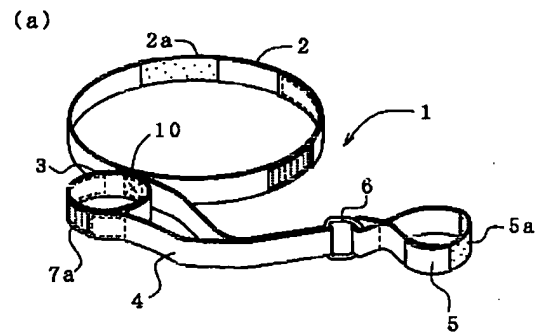
【図7】



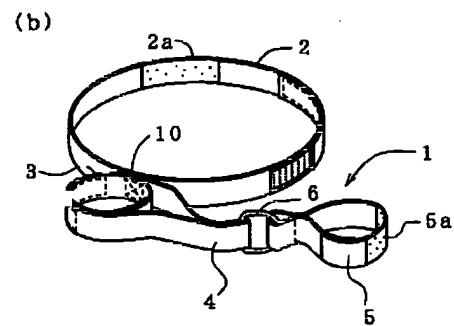
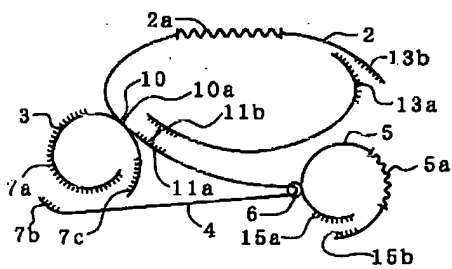
【図1】



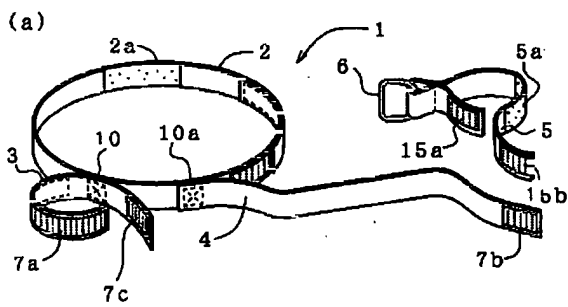
【図2】



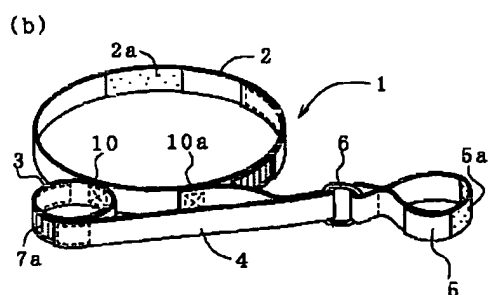
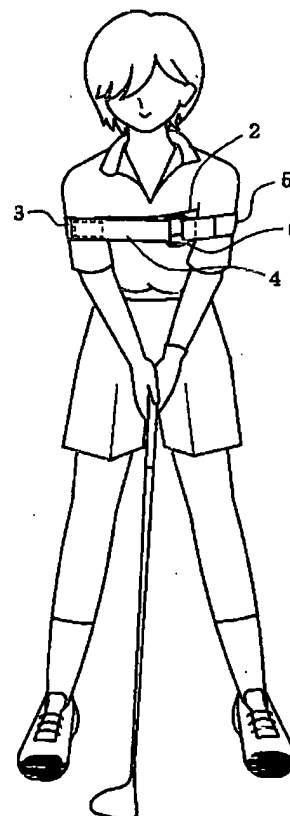
【図8】



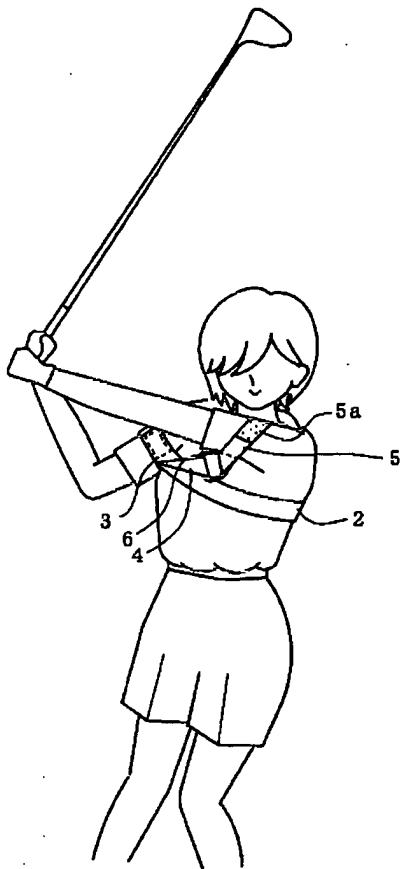
【図3】



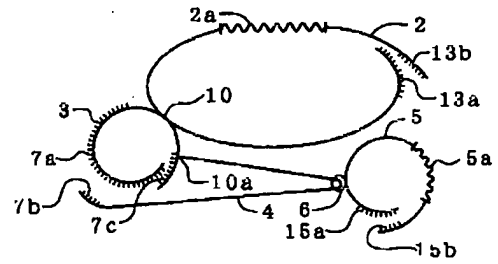
【図4】



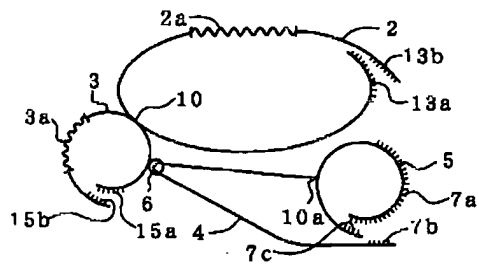
【図5】



【図9】



【図10】



【図11】

